

高橋玄洋

いのちある国と

萌の章



高 橋 玄 洋
たか はし げん よう

1929年 松江市に生まれる

1954年 早稲田大学日本文学科卒業

劇作を北条秀司氏に師事

現 在 放送作家

著 書 『生きて愛して死んだ』(テレビドラマ社)

現住所 所沢市新所沢団地97の7

いのちある日を／萌の章

定価 260 円

1966 年 3 月 19 日 第 1 版発行

著 者 © 高 橋 玄 洋
1966 年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 同興印刷株式会社

製 本 所 株式会社 永井製本所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 東 京 (291) 3 1 3 1-5 番

振 替 東 京 8 4 1 6 0 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 521

いのちある日を

萌の章

高橋玄洋 著

いのちある日を
萌の章

第一章

1

「お互いに長生きしすぎましたな」

大貫はそういいながら、黒い基石をパチリと置いた。信俊は腕組みしたまま、石を取り上げようともしなかった。

大貫は煙草に火をつけて、一服しながらいった。

「日本はこれからどうなるんでしょう」

もう何度も信俊の前でいったことだが、やはりいわずにはいられないのだ。

「以前は開会式の日、天皇陛下が御臨席になって、勅語を賜わる。そのときは議場はしんと水を打ったように静まり返って、私なんかも身内がひきしまるような気がしていたもんです。ところがどうです、この間の解散のときなんか議場は騒然として天皇陛下のお声が聞きと

れないんですからな」

長かった戦争は、去年の八月に終わっていた。天皇を中心にして、挙国一致、大東亜建設という美名の下に戦い、更には一億玉碎の覚悟にまでかりたてられていたのだが、終ってみればあつけないものだった。

あれから半年あまりたっていた。何百万人の餓死者が出るだろうといわれたその年の冬もやつとすぎ、春が近づいていた。

何百万人も餓死者こそ出なかったが、国民は飢え死に寸前のような状態で、やっとかつがつ生きのびていた。

山国の秩父では都会ほどの食糧難ではなかったが、戦争が終って、更に生活は苦しくなっていた。

信俊も大貫もあれから何をする気力もないまま、ときどきこうして顔を合わせて、碁をうつぐらいが関の山であった。

大政翼賛会から推薦された議員だった大貫は、しきりに帝国議會のことをなつかしがつた。議會はいまは国会と名をあらためて、婦人も参政権を得て、その第一回の選挙が近々行なわれようとしていた。殆んど新しい顔ぶればかりである。

たしかに新生日本を目指して、新しい波はおこりつつあった。敗戦をきっかけとして、解放され、新しい生命のほとばしるような動きもあった。

しかし、信俊も大貫も所詮それに歩調を合わせていける人間ではなかった。そして大半の人はまだ自分が生きていくことにさえ、精一ぱいの時代であったのである。

戦火こそうけなかったが、敗戦という事実により心理的に叩きのめされ、また昭和二十年の秋の度重なる風水害、冬のきびしい寒さにもかかわらず、秩父路にもまた春がめぐって来て、野山は一斉に緑に萌えたとうとしていた。今年もいつもの年とは変らないような春がやってきたのである。

信俊には何故か、それが不思議なことのようにおもえて仕方がなかった。

彼は朝起きると、いやおうなしに真向いに聳える武甲山を仰ぎながら「国破れて山河あり」という言葉をつぶやいて呆然となる。変らない、ほんとうに変らない。変らないのはこの自然だけだった。

あれから六ヵ月あまりのうちに、世の中は、日本は、何と大きく変わってしまったことだろう。信俊の頭の中には、敗戦の日にきいたあの蟬の声がまだ耳についてはなれないのに、毎日、目の前でがらがらと大きな音をたてて、一切のものが崩れ落ちてしまった。

戦争が容易ならなかったところへ突入していることはわかっていたが、日本が敗けることなどおぼろげに考えられなかった信俊であった。

連合軍の進駐、降伏条約の調印は、敗戦のなりゆきとして、信俊にも理解出来ていたからさほどおどろかなかった。

だが九月の末の新聞で、マッカーサー元帥と天皇と並んだ写真をみたときは、彼の心の中であっとおどろくものがあった。それは、天皇が連合軍総司令官のマッカーサー元帥を訪問したときのもので、略装で無雑作に立つ長身の元帥の横で、モーニング姿の天皇は如何にもあわれに見えた。

信俊も天皇を神とあがめ、絶対視してきた国民の一人であった。その天皇のために、大多数の国民はよろこんで生命をすてようとして来たのであった。天皇もやはり同じ人間であったのか。その発見はおどろきというより、彼の精神を根底からくつがえすようなものであった。その他にもまだあった。新聞は毎日、信俊らの信頼していた皇軍の悪道残虐な行為を書きだした。

さらに満洲事変から今度の戦争まですべてが、日本が無謀にも計画し、強引に行なったものだという暴露もあった。

信俊は朝、新聞を手にして開くのが何かいやになるような気分するときもある。自分たちのこれまで信じて来たものは、何も彼もうそいつわりだったとおもいしらされるだけなのである。では、何を信じればいいのか。自由主義、民主主義というが、掌を返えたようにそれに追隨していく気にはなれなかった。これもまた浮わついた空念仏のようにしか思えないのだ。

戦争犯罪人の逮捕、公職追放令、右翼団体の解散、財閥解体など、進駐軍からの命令は、次目まぐるしいほど出された。平時なら国をあげての大混乱をまねきかねないような改革も、

進駐軍の命令とあれば、格別反対するものもなく直ちに実行に移されていった。

それは古い日本の封建性を打ちやぶり、新しい文化国家への脱皮を促しているようにも思われるし、また日本を永遠に四等国へ転落せしめようとする占領軍の意図とも受けとられた。

「もう私らの出る幕ではありませんな」

大貫は深々と溜息をつきながらいった。だが、相変らず信俊は返事をしないまま盤面を見つめていた。大貫はさっきから信俊が次に打つ手を考えているのかとおもっていたら、そうでもないらしかった。

「そんなにむつかしい手じゃありませんが……」

「うむ」

それでもまだ信俊は、心はここにないといった調子だった。

「あんたはまだいい。自分の仕事ってものがあるから」

信俊はいった。

「いや、医者の方は長男が復員してきたから、そっちに任せてありますよ。私なんかもう役立たずです」

といつてから、大貫は、悪いことといったかな、と少し後悔するような気持もあった。

この家の長男も次男も戦死して、遂に帰って来なかったのだ。大貫もよく出入りして、彼らと面識があっただけに、尚更つらかった。殊に次男の信正にかけていた信俊の期待がどれほど

大きかったことか。

京都帝大に在学中に軍隊にとられ、特攻隊として華々しい名誉の戦死をとげた。戦争ももう終りのころであった。戦死した当時は、その華々しい死が世間にもてはやされ、家門の誇りだともいわれた。

しかし戦争が終ってみれば、無駄死にしかすぎない。もはや誰もただ国をおもう純真な気持で死んでいった彼らを讃えるものもなければ、逆に特攻隊くずれという言葉さえあらわれていた。特攻隊員の生き残りの者たちが、闇屋をやり、強盗になり新聞の社会面を賑わせた。そうしなければ生きていけない時代であったのである。特攻隊員にしろ何にしろ、死んだものは運がわるかったのだ、といわんばかりの世の中である。いや、かえって軍国主義者としてのレッテルをはられそうになり、肩身の狭いおもいさえしないといけないのだ。

大貫の長男は内地の陸軍病院にいたので、いち早く復員してきていた。しかし、大貫は北郷家では長男の話はあまり持ち出さないように気をつけていた。

「どうも近ごろはさっぱり碁にも力が入らなくなりましたな、お互いに」

大貫はそういいながら石を崩しはじめた。

こういうことは、近頃ちよいちよいあるのである。

大貫が来ると、することもない信俊は自然碁盤を持ち出して、二人は打ちはじめののだが、途中で二人とも、もう碁を打ちつづける気持をなくしてしまふのだ。

殊に信俊のほうがひどかった。碁盤をみつめているのだが、果して碁のことを考えているのか、どうか、はなはだ心もとない。そういうときは、大貫は石を崩すより他はなかった。

といって、二人に別段話し合うこともなかった。話していきどおるには、世の中の動きがあまりにもすさまじすぎた。

ただ、ただ、おどろき、あきれているよりほかはないのである。

そしてその動きは、この秩父の山奥で傍観しているだけではすまなかった。

農地改革という指令が、この地方一帯に大地主として君臨していた北郷家の地位を一ぺんに吹きとばしてしまった。わずかの土地を残して、あと全部の小作地を小作農たちに解放しなければならなかった。それはまだいいとして、それまで物納であった小作料が金納ということに決った。米のヤミ値は、いちじるしく高騰して、配給制度が有名無実の現在では、それが通り相場になっているのだが、公定価格の小作料しかもらえない。ということとは、これまで一反の畑から米二俵収めさせていたところを、せいぜい闇米が、二、三升買える程度の金額しかもらえないことである。

それさえもまだまけてもらおうとおもって、小作人たちは例年のように頼みに来る。信俊はもう怒る気力もなかった。

どんな時代にも、少しでも隙を見つけて抜け目なく立ちまわろうとするのは、長い間生かさず、殺さず式の圧制をうけて来た農民たちの身についた習性であったのかもしれない、信俊

はこのごろそんなことをおもうようになっていた。

純朴だとばかりおもっていた人たちが、都会からの買出し客に、米や野菜をこのときとばかり高く売りつけ、俄かに景気よくなつて、威張り散らすのを目のあたりに見て、苦々しくおもふ一方、また無理もないとおもうのだった。

農地改革に加えて、昭和二十一年の二月には、新円切り換えが行なわれた。預金は全部封鎖され、一ヵ月、世帯主五百円、他に家族一人あたり三百円の引き出ししか認められていない。インフレは猛烈ないきおいですすんでいくのに、財産は封鎖されたまま、日、一日と価値を失っていつているのである。

そして北郷家には、新円の収入を得る道はなかった。

むかし、北郷家に何かことがあると、手伝いにかけてきて、わずかな金にありついていてたその辺の小作人たちのほうが、ずっと景気がよくなっていた。

体面を保つことがむづかしくなつただけではない。たちまち生活にも困るほどの窮迫ぶりだった。

せいの才覚によつての売り喰い生活なのだ。信俊やせいの衣類や、家の置き物などが次々になくなつていった。信俊はそれを見て見ない振りをしている。

山林だけは辛うじて残ることになつたものの、戦時中の濫伐がたたつて、いまずぐ金になる目あてはなかった。

考え出せばきりもないことであるが、戦争中、村へ割りあてられた戦時公債も、北郷家が殆んど一手に引き受けて買った。国のため、村のためという気持もあったのである。そんなものは、いまは紙屑同然である。

それから仁科たちの北進論に刺激されて、満鉄の株も大分買った。それもまた紙屑。

繭の仲買業は戦争のために閉鎖し、織物工場は軍需工場へ転換ということで、織機は供出したまま、戦争は終わった。

これからわずか五町歩の、最終的にはそれも一町歩になるらしいが、それだけの田畠を残して、自作農として、どうしてこれだけの家が支えていけるだろうか。

信俊は勿論、鍬をにぎったことはなかった。これからも本気になってにぎろうという気にはなれない。なっても無理なことはよくわかっていた。戦争がはげしくなってから、裏の畠で、国造たちが作っている菜園を少し手伝ったことがあるが、それも退屈しのぎの真似ごとみたいなものだった。

その頼りにする国造も、君子が居なくなってから、めっきり老いこんでしまっている。

畠は、いまは君子の夫である重森が主になって、面倒をみていた。

重森は命からがら樺太を脱出して、北郷家へやって来たが、そこには帰りついているはずの君子の姿はなかった。

樺太からの引き揚げは、まだはじまっていなかったのだ。君子たちは一度はソ連軍の攻撃を

さけて南下したが、終戦後、ソ連軍の命令で再び白鳥沢へ引き返したことなど、ソ連軍の攻撃の前に、あわただしく別れた重森はしるよしもなかった。

重森は、北郷家へ身を寄せて、君子の帰りを待つことにした。君子の消息は皆目わからなかった。

「お宅は信和君が無事に帰られたんだから、……これからはもう若いものの時代ですよ」大貫は慰めにはならないとはわかっていたが、そういうより仕方なかった。信俊はさらに眉をひそめて気むずかしそうな表情になった。そして、

「困ったもんです」

と吐き出すようにいった。

戦争は北郷家の財産も地位も、そして二人の息子もとみ子の夫、沼崎をもうばってしまった。無事だったのは、三男の信和だけである。頼りにしたいのは、山々である。だが、その信和のことで、信俊は更に苦い気持を味わっていた。

予科練に行っていて、九十九里浜にいた信和は、終戦後、直ちに復員してきた。

信和の無事な姿をみて、信俊もせいもよろこびほっとした。よく帰って来たと泪の出るようなおもいだった。

信和は帰って来るなり、せいの用意した飯をがつつとかきこんだ。

「大変だったろう」

と信俊がいい、せいも横から

「日本が敗けるなんて夢にもおもわなかったけど、予科練じゃどうだった？」とか、

「汽車はこんでただろう」

とか、

「お友だちもみんな帰ったのかい？ 戦災で家を焼かれましたった人もあるんだらうね」と、話しかけたが、信和は一言も返事しなかった。

「そっとしておいてやれ、疲れているんだらう」

と信俊はせいにいい、信和には、

「お前の気持はよくわかる。こんなことになるとは思っていなかったらう。わしだってそうだ。しかし、お前はまだ若いんだ。これからが大事なんだ。再出発して日本の国にほんとうに役立つ人間にならないといけないんだ。これからはお前たちの時代なんだ」といった。

信俊の頭の中には、予科練へ入隊する前の父と子の心の通い合った一瞬の貴重なおもい出があった。それまではお互いにさけ合うようにして来たが、信和の国をおもう純真な気持に信俊は心を動かされ、彼のねがいをきき入れてやった。あのとときの信和は素直だった。父親の言葉に、はつきりとたのもしい返事をした。